ウェールズのアーサーをめぐって(1)

―― 歴史と文学の中から ――

中　野　節　子

中世のロマンスものの中で、豪華絢爛たる衣装をまとって登場するアーサー王像、彼と王妃の構える宮廷をめぐって、美女と勇者たちの恋と冒険の物語絵巻が繰り広げられる。道ならぬ恋に身を焼く貴婦人たち、求道の旅へ赴く騎士たち、円卓の騎士の結束を揺るがす、このような恋と野望の物語が、民族の特徴を示すエピソードを加えながら様々に変容し、全ヨーロッパで連綿と書き連ねられるのである。中でもクレティヤン・ド・トロワ（Chrètien de Troyes）のフランス風宮廷ロマンス、ウォルフラング・フォン・エッシェンバッハ（Wolfram von Eschenbach）のドイツ風求道物語、そしてトマス・マロリー卿（Sir Thomas Malory）のイギリス的理想の王国の崩壊の物語等が有名である。そして現在までのところの一般的解釈は、このアーサー王ロマンス群の始まりを、ケルト人の国ウェールズに見ようとしている。歴史と文学の世界から、原アーサーのイメージを追ってみたい。

A．歴史の文献の中から ―― アーサーの面影を探る

アーサー（Arthur, ウェールズ語読みではアルスル）という人物は、ウェールズの歴史書の中にはまず、5世紀の後半から6世紀の始めにかけて活躍したブリトン人の族長、並びに戦士たちの指揮官として登場してくる。ラテン語のアルトリウス（Artorius）からきたと考えられる彼の名前は、5世紀頃、南ブリテンのローマの勢力を維持するために働いていた家系の出であることを暗示している。しかしながら不思議なことに、ブリテンの歴史の父と呼ばれているブリトン人の僧ギルダス（Gildas：c.495－570）がラテン語で書いた、『ブリテン崩壊について』（*De Excidio Britannia*, c.547）という文献には、サクソン人を相手にブリトン人が勝ち取ったベイドン山（Mons Badonicus）での大勝はしっかりと書き込まれているのにもかかわらず、アルスルの名前は一切言及されていない。しかしながら後代になるにつれ、この戦いの司令官がアルスルで、その後彼の治世の下で、ブリテンの黄金時代が続いたということになってゆくのである。

『カンブリア年代史』（*Annales Cambriae*, c.1100）という文献には、（516. Bellum Badonis, in quo Arthur portavit crucem domini nostri Jhesu Christi tribus diebus et tribus noctibus in humeros suos et Brittones victores fuerunt.）、すなわち516年にベイドン山の戦いが起きたこと、その戦いでアルスルという人物が、救い主キリストの十字架を三日三晩にわたって肩に担いで、勇敢に戦ったことが記されている。続いて、（537. Gueith Camlann in qua Arthur et Medraut corruerunt.）、すなわち537年にカムランの戦いがおこり、アルスルとメドラウト（Medraut）が倒れたことが述べられる。しかしこの二人が、はたして味方であったのか、はたまた

敵であったのかについての言及はない。そして現在までのところ、多分この書物が、アルスルについての最も確かな歴史的記述であろうと考えられているのである。

一方、グウィネズ（Gwynedd）地方のエルボドガス（Elbodogus）司教の弟子であると名乗る、9世紀頃の僧ネンニウス（Nennius）の手になる『ブリトン人の歴史』（*Historia Brittonum*）にも同様の、アルスルに関する記述が見られる。すなわちアルスルは「戦闘の指導者」（'dux bellorum'）と記され、サクソン人を相手に戦った12回の戦闘の勝利者であったと述べられる。またこの最後の戦いがベイドン山でのものであるとも記されている。しかし資料として用いられたのは、専らアルスルの雄姿を歌ったウェールズの古歌であると考えられ、真偽のほどは定かではない。この書物には、ジュリアス・シーザー（Jurius Caesar）の時代から始まって、アルモリカ（Armorica）、すなわち今のブリタニー地方へのブリトン人の移住、ローマ軍の撤退、ヴォルティゲルン（Vortigern）のブリテン島へのサクソン人招聘等、7世紀末までのブリテンの歴史が綴られている。またこの書の最後に収められた「ブリテンの不思議」（'Mirabilia Britanniae'）には、イングランド、スコットランド、ウェールズ、そしてアイルランドにおける20の不思議な自然現象が収録されており、その中には2件の「武人アルスル」（'Arthurus miles'）に関する不思議が記述されている。一つはカルン・カヴァス（Carn Cafall）の山頂に積み上げられた石の上に残る彼の犬の足跡であり、もう一つはガンバー・ヘッド（Gamber Head）にあるアルスルの息子の墓の記述である。また、537年のカムラン（Camlan）の戦いで、アルスルとメドラウド（Medrawd）という二人の強者が命を落としたという記述もなされている。

一方、モンマスのジョフリー（Geoffrey of Monmouth：c.1090－1155）によって、1136年頃ラテン語で書かれたと考えられる『ブリトン諸王の歴史』（*Historia Regum Britanniae*）の伝えるアルスル像は、極めて特異なものとなっている。すなわちこの文献で初めてウェールズの族長アルスルは、中世の宮廷に君臨する華麗な王への見事な変容をとげるからである。まずアルスルの宮廷は、従来のケシ・ウィッグ（Celli-wig）の地からウスク（Usk）川沿いのカエルレオン（Caerleon）、すなわちウェールズ語で、カエル・スィオン・アル・ウィスク（Caer Llion ar Wysc）に移されている。ジョフリーは、この書と『マーリンの一生』（*Vita Merlini*）の二冊の本において、カムランの戦いで瀕死の重傷を負い、その傷を癒すためにアヴァロンの島（Ynys Afallon）に運ばれてゆくアルスル像を初めて登場させている。すなわち、永遠の命を保って危急存亡のときに蘇るという、ブリトン人の待望のヒーローとしてのアルスル像が、ここに創造されているのが分かる。また、後のアーサー王物語で大活躍する魔法使いマーリンの登場も、この書の中でのことである。『ブリトン諸王の歴史』の第七章「メルリーニの予言」（'Prophetiae Merlini'）において、ヴォルティゲルン王の前で予言をする少年メルズィン（Myrddin）、すなわちマーリンのことが述べられている。彼の予言の要点は、ブリトン人（赤いドラゴンによって象徴される）は神を恐れぬ傲慢さが災いして、一旦はサクソン人（白いドラゴンによって象徴される）の支配下に置かれるが、やがて現われる勇者によって、再び勝利するというものであった。このブリトン人の助っ人の一人こそ、赤いドラゴンの印を掲げて登場するアルスルその人であると考えられている。彼の父ウースル・ベンドラゴン（Uthr Bendragon）も、空に現われる一匹のドラゴンを見ることにより、自らが王となる予言を受けるというように、アルスル一家とドラゴンの関係は深い。

一方、有名な「円卓」（'the Round Table'）が初めて登場するのも、ジョフリーのこの『歴史』を用いて記されたと思われる、ワース（Wace）のノルマン・フランス風の歴史書『年代誌物語』（*Roman de Brut*，1155）の中でのことである。そしてジョフリーの描いたこの新しいアルスル像が、彼の本のウェールズ語への翻訳書『王の年代誌』（*Brut y Brenhinedd*）等を通して、再びウェールズの

地に戻され、広く伝播したと考えられるのである。

創作文学の世界においては、時期を同じくして、12世紀フランスの詩人クレティヤン・ド・トロワの「イヴァン」('Yvain')、「パルセヴァル」('Perceval')、そして「イレック」('Erec') という創作ロマンス詩が書かれる。そしてこれらに相当するウェールズの三つの散文ロマンス、「オワァイン」('Owain')、「ペレドゥル」('Peredur')、そして「ゲライント」('Geraint') が、中世散文物語集『マビノギオン』(*Mabinogion*) の中に採録されてゆくのである。ここでも、アルスルの宮廷は終始カエルレオンに置かれていて、明らかにジョフリーの影響下の物語であることを示している。しかしながらこの三つのロマンスでは、アルスルの姿はしだいに後景へと退き、焦点はあくまでも彼の宮廷の騎士たちの恋と武勇の物語となっている。そしてこれらの騎士たちの活躍こそが、ジョフリーの書には一切言及されてはいない、全く新たな要素だったのである。

このように見てくると、長らく独自の文字を持たず、歴史は「バルド」('bard') と呼ばれた詩人・語り部たちが、専ら口承の形で伝えていったウェールズでは、後代になってラテン語を使って書かれた歴史書の中に登場するアルスル像には、その地に伝えられた口承文学、すなわち短詩エングレン (englyn)、伝説、物語等の文学の中から、その素材が提供されていたことが分かる。次にこれらの歴史書に先立って残されている、ウェールズ語の文学の文献に現われた、原アルスルのイメージを追ってみることにしよう。

B. 文学の中から —— アルスルのイメージを探る

1 韻文の中で

アルスルという人物が最初に作品に登場するのは、ウェールズに残された二つの古詩の中でのことである。一つは「ゴドズィン」('Y Gododdin')、そしてもう一つは「キンズィランのためのエレジー」('Marwnad Cynddylan') という詩であり、いずれも人々の信頼をかち得る武人の姿を浮かび上がらせている。

「ゴドズィン」という長詩は、6世紀後半に活躍したと考えられる詩人アネイリン (Aneirin) の作で、カトライス (Catraeth) (ヨークシャーの東部キャテリック (Catterick)) の近く) で戦死したゴドズィンの若者たちを悼む、一連の短いエレジーである。その中に、'gochore brein du ar uur caer ceni bei ef arthur.' (「彼は要塞の塀の上で黒いからすを飼っていた、アルスルではなかったけれど。」) という記述がある。また7世紀中頃の作者不明の詩 (戦いの末一人生き残った勇者キンズィランの妹ヘレッズ (Heledd) の作と考えられる)「キンズィランのためのエレジー」には、'Brodyr a'm bwyad, oedd gwell ban fythyn, /Cenawon Arthur fras, dinas dengyn, / Y rhag Caer Lwytgoed nis digonsyn. /Oedd crau y dan frain, a chrai gychwyn.' (「兄弟たちがわたしを養ってくれていた、彼らが生きていた時分はずっとよく、/頑健なアーサーの同胞よ、強固な砦よ。/今やルイトゴイドの城には、彼らが座る姿はない。/そこには血に濡れたからすが、新たな餌を奪い合うのみ。」) と歌われているのである。

また『カエルヴィルズィンの黒い本』(*Llyfr Du Caerfyrddin*, c.1250) と『タリエシンの本』(*Llyfr Taliesin*, c.1275) の中にも、アルスルという人物に言及した幾つかの詩が掲載されている。いずれも12世紀から13世紀頃にかけて、これらの本が書かれた頃、このアルスルなる人物が既に人々に良く知られる存在として、伝説や民話の中の英雄になっていたことを示す詩である。

『カエルヴィルズィンの黒い本』は、ウェールズ語で書かれた最古の文献と目されている書であり、

14編に及ぶ宗教詩、メルズィン（マーリン）伝説詩、6編のエレジー、短詩エンゲリオン、アルスルに関するものを含む8編の伝説詩等が収められている。

その中の「エルビンの息子ゲライント」('Gereint Fil' Erbin') という詩には、'Yn Llongporth y gwelais i Arthur, ／Gwŷr dewr cymynynt â dur, ／Amerawdwr llwiawdwr llawur.' (「スォングボルスでアルスルを見た、／鋼で切り殺す勇猛な男たち、／皇帝、混乱の中の指導者。」) という箇所があり、これが「皇帝アルスル」像の最初の登場と考えられるのである。

また「門番はどんな男か？」('Pa Wr yw'r Porthor?') という詩の中では、砦の入り口にやって来て、自分と家来たちのために案内を乞うアルスルが登場する。彼の率いる戦士たちの中には、カイ（Cai)、ベドウィル（Bedwyr)、スィールの息子マナウィダン（Manawydan ab Llyr)、そしてモドロンの息子マボン（Mabon am Modron）等、『マビノギオン』の中の「キルーフとオルウェン」('Culhwch ac Olwen') の物語で活躍する登場人物の名前も、既に現われていることが分かる。

また「墓場の短詩」('Englynion y Beddau') という詩の中では、アルスルは「予言の息子」('Mab Darogan') の伝統をひく者として登場する。'Bedd i Farch, bedd i Wythur, ／Bedd i Wgawn Gleddyfrudd. ／Anoeth byd bedd i Arthur.' (「マルッフの墓、グウィスルの墓、グガウン・グレズィヴリズの墓。世界の神秘であるアルスルの墓。」) と歌われ、アルスルの墓だけは、世界の謎として、最後の審判の日まで見つけることはできないだろうと述べられているのである。

また「グウィズネ・ガランヒールとニッズの息子グウィンの対話」('Ymddiddan Gwyddneu Garanhir a Gwyn ap Nudd') という詩の中では、'Mi a füm lle llas Llacheu／Mab Arthur uthr yng ngherddeu, ／Banryreint brein ar creu.' (「私は行ったことがある、／アルスルの息子サッヘが殺されたところへ、／歌の中で恐ろしく、からすが血潮の上で鳴くときに。」) と歌われている。

'Pa Wr yw'r Porthor?' (「門番はどんな男か？」)、または 'Ymddiddan Arthur a Glewlwyd' (「アルスルとグロイルイドの対話」) と呼ばれる有名な詩は、次のように始まる。これはアルスルと彼の家来たちが連れ立ってある館を訪れたとき、門の外で交わされた、門番のグロイルイドとアルスルの対話の形をとって書かれた詩である。

対話は次のように始められている。

'Pa ŵr yw y porthawr?'
'Glewlwyd Gafaelfawr.
Pa ŵr a'i gofyn?'
'Arthur a Chai Wyn.'
'Pa ymdda gennyd?'
'Gwŷr gorau I'm byd.'
'I'm tŷ ni ddoi
Onis gwaredi.'

(「門番はどんな男か？」
「グロイルイド・ガヴァエルバウルよ。
尋ねているのは、どんな奴だ？」
「アルスルと美男のカイだ。」
「して一緒に旅しているのは？」

「世界中で一番の男たちだ。」
「そいつらに会わせてくれないかぎり
おいらの家には入れられないね。」)

続く89行の中には、アルスルが、産褥の床に就く母親と壁の間から、生後三日目に姿を消してしまったモドロンの息子マボン、スィールの息子マナウィダン、ベドウィルなどの人物を次々と紹介するという形で、伝説上のお馴染みの人物たちが登場してくるのである。

一方、6世紀の後半頃、フレゲド (Rheged) の地で活躍していた詩人タリエシン (Taliesin) の手になると考えられる『タリエシンの本』の中には、'Preddiau Annwfn' (アンヌウヴン剥奪) という詩が含まれている。そこには、アルスルと男たちの、海の彼方の異界アンヌウヴン、すなわちケルト的別世界シィッズィの砦 (Caer Siddi) への冒険、アンヌウヴンの王の所有する大鍋等の宝物を持ちかえるという話が語られている。しかし同時に、'Tri llonaid Prydwen yr aetham iddi:/Nam saith ni ddyraith o Gaer Siddi.' すなわち、アルスルの船である「プリドウェン」('Prydwen') に乗って出かけては行ったが、別世界アンヌウヴンの城 'Caer Siddi' から戻ってきた男たちは、7名に過ぎなかったとも記されているのである。

最も初期のウェールズ文学の面影を留める三題歌トライアド (Traids) は、人物や事件を三つ組み合わせて述べてゆく短詩であり、一種の記憶法の形をとった文芸である。その中にも、アルスルという人物は再三登場している。例えば 'Tri Lleithigiwyth Ynys Prydain'、すなわち「ブリテン島の三つの民族の王たち」という三題歌には、メネウ (Mynyw — 現在のセント・デイヴィッド)、コンウォールのケシウィッグ、そして北部のペン・フリオネッズ (Pen Rhionydd) の地で、それぞれ同時に王座につくアルスルの記述がある。また、「ブリテン島の三つの幸運な隠蔽」('Tri Matcudd Ynys Prydain') では、ロンドンのホワイト・ヒルに葬られたスィールの息子聖なるブランの首が、自分以外の者の力によってこの島が守られることに我慢ならないという、アルスルの自尊心のために暴かれ、結果としてフランスの侵攻を許してしまい、三つの不幸な暴きの一つとなったことが述べられる。また「ブリテン島の三人の寛大な男たち」('Tri Hael Ynys Prydain') には、セネスィト (Senyllt) の息子ニッズ (Nudd)、セルワン (Serwan) の息子モルヴダフ (Morfdaf)、そしてティドワル・トッドグリト (Tudwal Tudglyd) の息子フレゼルッフ (Rhydderch) という三人の寛大な男たちが存在したことが述べられ、その上彼らよりずっと寛大な第四番目の男がいたとして、アルスルが登場している。また「ブリテン島の三人の略奪者たち」('Tri Rhuddfoag Ynys Prydain') として、ベリ (Beli) の息子フリゥン (Rhun)、器用な手を持つスェウ (Lleu)、そして富者モルガン (Morgan) を挙げたあと、彼らよりずっと徹底的した略奪者がいたとして、アルスルの名前が記述されている。また「ブリテン島の三人の高貴な囚人たち」('Tri Goruchel Garchror Ynys Prydain') には、スィール、モドロンの息子マボン、そしてグウァイル (Gwair) の名前を挙げたあとで、アルスルについての言及があり、彼もまた自分の従兄弟であるカステンニン (Custennin) の息子ゴレイ (Goreu) によって救出されたと述べられている。最も奇妙な記述の一つは、アルスルの妻グウェンホヴァル (Gwenhwyfar) についてのものである。「アルスルの三人の偉大な王妃たち」('Tair Prif Riain Arthur') として挙げられる三人のグウェンホヴァルは、それぞれケウリッド・グウェント (Cywryd Gwent)、グレイダウル (Greidawl) の息子グウィシール (Gwythyr)、そして巨人ゴグヴラン (Gogfran) の娘たちと説明されていることである。

これらの詩よりも随分と後代になって、推定では1150年頃書かれたと考えられている宗教詩「ア

ルスルとエリィルの対話」('Ymddiddan Arthur a'r Eryr') において、もう一面のアルスル像が垣間見られる。ここでは彼は、半異教的な「コンウォールの軍団の長」と描写され、終始「神と対決する者」として描かれているのである。そこにはまさにキリスト教化される以前の、野生的で猛々しいケルトの族長の姿が現われている。

2　散文の中で

1）「キルーフとオルウェン」の物語から ―― アルスルと戦士たち

アルスルのテーマを語った、初めてのウェールズの散文学というのは、中世散文物語集『マビノギオン』の11編の物語の中の、5編のアルスルに関する話の最初の作品、「キルーフとオルウェン」('Culhwch ac Olwen', c.1100) の物語である。この話の中でのアルスルは、コンウォールのケシ・ウィグに宮廷を構え、魔法と魅惑の国を治める者として登場する。彼の支配は、南ウェールズ、南アイルランド、ブリタニー、サマセット、デヴォン、そしてコンウォールにまで及ぶ。若者キルーフは、巨人イスバズァデン (Ysbaddaden Bencawr) の娘オルウェンを探す旅を成就するために、従兄弟アルスルの宮廷にやって来て援助を求める。最後にキルーフは、巨人の長の出す様々な難題を解決し、めでたくオルウェンと結婚するのであるが、最高に手間取ったのが、猪の長トルーフ・トロイス (Twrch Trwyth) 狩りであった。そしてこの冒険で大活躍するのが、アルスルの宮廷から選ばれた6名の戦士たちであった。やがてこれらの戦士たちが、それぞれ中世のアーサー王の宮廷の雅びな騎士たちへと変身してゆくのである。

まず、アルスルの右腕として活躍するカイ (Cai) は、九日と九晩にわたって水のなかで息を止めていることや、眠らずにいることのできる男である。機嫌のよいときには身の丈を、森の中のどんな高い木の梢より高くすることができたし、放出する熱気のために、自分の体の回りにあるもの全てを乾かし、火をおこす火種を提供するような熱血漢であった。続いて美男のベドウィル (Bedwyr)。彼は片腕であったにもかかわらず、戦場においては三人分の勇者に匹敵する活躍をし、その槍の一突きで九つの突きを呼ぶ程の勇者で、カイの行くところ必ずその姿が見られたという。そしてまだ一度も見たことのない地にあっても、まるで自らの故郷にいるように動き回ることのできる道案内人のキンデリグ (Cyndylig)。あらゆる言語に精通している言葉の通訳者グリール (Gwrhyr)。アルスルの近親者で、全ての探究の成功者グアルッフマイ (Gwalchmei)。姿眩ましの術をもつメヌウ (Menw) という6名の戦士たちに伴われて、若者キルーフは、幻の美女、巨人イスバズァデンの娘オルウェンをかち得るための冒険に出てゆくのである。

父イスバズァデンの出した課題は全部で39件、それらは主として、娘オルウェンの結婚披露宴にかかわる事物を獲得することであるのだが、最大の難問は猪の長トルーフ・トロイスの両耳の間にある櫛とはさみ（剃刀も含まれることがある）を手に入れることであった。これらは全て、巨人イスバズァデンが、娘の結婚披露宴に出席するときの身支度のために必要な道具である。神の怒りをかって猪の姿に変えられたと説明される、このトルーフ・トロイスは、以前は力あるアイルランドの王であり、今でも子分の猪たちに守られて生活している。その猪狩りに赴くキルーフと6名のアルスルの戦士たちが、数々の冒険を重ねる様子が語られてゆく。その中に、狩猟長を勤めるモドロンの息子マボンを見つけ出すために（彼は生後三日目に母の元から姿を消してしまっている）、この世に一番古くから住む動物を捜し出して、その行方の情報を手に入れねばならないという話も含まれている。一種の、最古の動物探しの話である。黒つぐみ、牡鹿、ふくろう、鷲、鮭と逆上って、情報を得ようと努めるのだが、これらの動物たちでさえもアルスルの使者には一目置いており、彼らのためには、一肌脱いで協力を惜しまなかったと述べられている。

一方、この物語には既に、後のアルスルとカイの不仲の原因となるような挿話も登場している。すなわち、エリの息子グレイド（Greit mab Eri）の飼っている犬ドルドウィン（Drutwyn）を繋ぐひもを作るのに、髭男ディスィス（Diilus）の髭が求められる。その髭を生きながら引っこ抜くという難事を成し遂げるためのカイの工夫をからかって、アルスルの作った一つのエングレン（小唄）が原因となり、アルスルに対するカイの恨みが生じたと言うのである。それは次のような歌である。

Tennyn a wnaeth Cai
O farf Dillus fab Efrai
Pe bai'n iach, dy angau fyddai.

（カイが一本のひもを作った、
エヴライの息子ディスィスの髭で。
ディスィスがもし生きていたとしたら、
カイの命はなかったろうに。）

'Ac am hynny fe sorrodd Cai, fel mai o'r braidd y bu i filwyr yr ynys hon wneud heddwch rhwng Cai ac Arthur. Ac er hynny, nid ymyrrodd Cai ag ef yn ei angen o hynny allan, nac er bod Arthur yn ddinerth nac er lladd ei wŷr.'、（「これにカイは腹を立て、その結果、カイとアルスルとの間に平和を取り戻すことは、この島の戦士たちには不可能なこととなってしまった。もはや、カイはアルスルの災難にも、彼の家来たちが殺されたときにも、手を貸そうとはしなくなった。」）と述べられている。誇り高いカイの気持ちを軽んじた、アルスルの思慮を欠いた振る舞いと言わざるをえない。

巨人の父が課した、オルウェンを妻に迎えるための条件を満たすために、キルーフが成し遂げる冒険の援助をするアルスルの戦士たちの活躍は、実に生き生きと語られる。一方、アルスルは直接手を貸すことはない。唯一例外は、最後に記述される魔女との戦いのときのことである。実際に巨人の首を打ち落とすのは、キルーフと同じく従兄弟にあたる（亡き母の妹、羊飼いカステンニンの妻の息子）ゴレイ（Goreu）である。しかしながら全ての冒険は、全面的なアルスルの支援あっての成功であり、首を打ち落とされる前の巨人イスバズァデンの言葉、'Ac nid oes rhaid iti ddiolch i mi am henny ond diolch i Arthur, y gŵr a'i henillodd hi iti. Ni chaet ti hi fyth o'm gwirfodd i. Ac y mae'n hen bryd i derfynu fy mywyd innau.'、（「俺様に礼を言う必要はない。おまえを助けてくれたアルスルに礼を言うがよかろう。わしは、自らすすんでは、そうしようとは思わなかったのだからな。」）というのが事実なのである。

2）「ロナブイの夢」の物語から――頼り無いアルスル

一方、「ロナブイの夢」（'Breuddwyd Rhonabwy'）の物語の中に登場するアルスルは、まことに頼り無い姿を呈している。

ここでのアルスルは、コンウォール地方との深い関わりの中に登場する。彼はベイドンの戦いに備えて、世界各地から集合してくる大軍団を待って、ハヴレン（Hafren）（現在のセヴァーン（Severn））川の中州に天幕を張っている。戦いに出て行こうともせず、ひたすらウリエンの息子オワァイン（Owain ab Urien）とウェールズに伝わるチェスゲームの一種、グウィズブス（Gwyddbwyll）の試合に現をぬかす、無責任で頼り無い長として登場している。ここで印象に残る

のは、従来の英雄的アルスルのイメージとは打って変わった、問題児としてのアルスルの姿である。

物語は次にように進行する。

ときは12世紀の中頃、ところはポウィス（Powys）の地。この物語の主人公となるロナブイは、それまでの物語の主人公たちと異なり、さしたる地位もないごく普通の兵士である。マレディズ（Maredudd）の息子たちのうち、圧倒的に恵まれた立場にある兄マダウグ（Madawg）を恨んで反乱をおこした、弟イオルエルス（Ioreruth）討伐の軍に参加したロナブイは、友人二人と、イゾンの息子カドウガン（Cadwgan ab Iddon）の息子ヘレイン・ゴッホ（Helein Goch）の家に泊まり、広間に敷かれていた黄色い牛の皮で上に眠り込んでしまう。そのとき見た夢の中で、6世紀も前に時代を逆上り、ベイドンの戦いに兵を招集するアルスルの姿に遭遇することになる。目を奪うばかりの華やかな装束に身を固めた軍団が、ハヴレン川の中州で待機している司令官アルスルの下に、続々と結集してくる。しかし肝心の総大将アルスルは、一向に行動を開始する気配はない。堪忍袋の緒を切らした剛腕のカラダウグ（Caradawc Vreichuras）の要請によって、やっと動き出すといった具合である。しかしながら、ウリエンの息子オワファインとのグウィズブスの試合にかまけてしまい、すぐに戦いに赴く様子もない。さらに呆れたことには、オワファインのからす軍団が、暇を託つアルスルの家来たちに、さんざんにいたぶられていると報告にくる使者の哀願によって、襲撃を止めさせてくれと頼むオワファインの要請にも耳をかさず、アルスルはひたすら「ゲームを続けよ」（'Gware dy ware'）と繰り返すばかりである。堪り兼ねたオワファインが、戦いの激しい所に軍旗をかかげると、戦いは一転する。劣勢を挽回して、たちまち狂気の如くアルスルの兵に襲いかかるからす軍団。今度はアルスルの使者たちが、攻撃を止めてもらうように頼みに来る。すると先程の報復とでもいうように、その願いを三回にわたって拒否するオワファイン。とうとう終いには、怒ったアルスルがグウィズブスの駒を叩きつけて壊し、ゲームを終了させるという始末であった。ここには統率者としての自分の立場も考えず、ひたすら子どもじみた行動を続ける、思慮と分別を欠いた自分勝手な人物としてのアルスルの姿が描かれる。やがてベイドンの戦いでは、大ナイフのオスラ（Osla Gyllelluawr）との休戦が成立し、グロイク（Groec）、すなわちギリシアの地から運ばれてきた貢ぎ物も、実際に命を挺して戦った兵士たちにではなく、休戦中に、専らアルスルを讃える歌を作り続けただけの詩人たちへの報酬として与えられたと述べられている。こうして兵士ロナブイが黄色い牛の皮の上で三日三晩見たという、鮮やかな武具や礼服、高価な衣装の色彩、魔法の宝石のきらめき、賑やかな喧騒の音等に埋めつくされた「夢の物語」が終わるのである。圧倒的な力を持つ帝王を意味する「アムヘロドル」（'ymherodr'）という言葉が、アルスルに付けられるのもこの物語からであり、それらを考慮すると何とも皮肉な物語だと言わざるをえない。

この他にも、カドク（Cadog）、パダルン（Padarn）、カランノグ（Carannog）、そしてギルダス（Gildas）等の、ウェールズ地方での聖人の活躍を綴った聖者伝に描かれるアルスル像も、はなはだ芳しくないものである。ここでも、一般に流布している英雄としてのアルスルは始終影を潜め、愚かで傲慢な地方の専制君主、聖人たちの迫害者としてのアルスルが描かれている。これらの聖者伝に登場するアルスルは、最後には聖人たちの説得によって罪を悔い改め、神を信じ、教会の保護者になったとまとめられている。

3）「三つのロマンス」（'Y Tair Rhamant'）から――宮廷を束ねる王アルスル

A）「泉の貴婦人の物語」、または「オワファインとリネッド」から、

「三つのロマンス」の中の第一話は、主人公であるウリエンの息子オワファインと、泉の貴婦人

(Iarlles Ffynnawn) に仕える侍女リネッド (Luned) の活躍する物語である。アルスルは、冒頭から「皇帝アルスル」('Yr amherawdyr Arthur') として登場している。この 'amherawdyr' というウェールズ語は、ラテン語の 'imperator' (皇帝) からきたと想定される語で、最高司令官を意味している。まず彼の支配する宮廷が、カエル・スィオン・アル・ウィスク、すなわち現在のカエルレオンの地にあったと言及されている。前述した「キルーフとオルウェン」物語からアルスルの宮廷の門番として既にお馴染みになっている、強握力のグロイルイド (Glewlwyd Gafaelfawr) も登場する。宮廷で開かれる宴の主人役を勤めるアルスルは、食事の用意が整えられるのを待つ間、一同の同意を得た上で一眠りする。その間クリドノの息子ケノン (Cynon uab Clydno) が、自分の冒険談を語って聞かせる。食事の後で、今度はオワァインが、クリドの冒険に自ら挑戦してみるのである。泉の貴婦人と結婚し宮廷には帰ってこないオワァインを尋ねて、最後にはアルスル自身が、冒険に出かけて行く。こうしてケノンの冒険は、オワァイン、アルスルと三度繰り返されることになる。アルスルの宮廷の重臣たち、特にグアルッフマイとカイが、何度も登場して物語に花を添える。以前の物語にない目新しい要素としては、オワァインが結婚する泉の貴婦人を初め、侍女のリネッド、瀕死のオワァインを助ける伯爵婦人等、様々な女人が登場することである。そしてまた、全ての冒険はアルスルの宮廷から始まり、最後にそこに無事戻ってくることによって終了しているのである。

B) 「エヴラウグの息子ペレドゥルの物語」から

この第二話のロマンスは、北イングランドと南スコットランド、すなわちゴグレズ (Gogledd) に所領を持ち、大きな勢力を張っていたエヴラウグ伯爵 (Efrawc Iarll) の7番目の息子ペレドゥル (Peredur) の物語である。戦いで命を落とした、夫と息子たちの二の舞をさせまいとする母の配慮で、人里はなれた森の奥深く、女や子ども、そして戦いとは無縁な穏やかな男たちと一緒に生活していたペレドゥルは、ある日、アルスルの宮廷からやって来た三人の騎士たちに遭遇する。一瞬にして武人の家生まれの血に目覚めたペレドゥルは、母親の「あの方たちは天使たち (egylyon) ですよ。」という言葉に満足せず、彼らが「騎士」('marchawc') という人々であることを確かめる。すぐに自分もその一員に加えてもらうために、身の回りにいた農耕用の駄馬に鞍の代わりの荷籠を乗せ、手には柊の木で作ったダートを一杯に抱えて、'Dos ragot, y lys Arthur, yn y mae goreu y gwŷr a haelaf a dewraf.' (「アルスルの宮廷へお行きなさい。そこには、最高の身分の、もっとも寛大で勇敢な方々がおいでですよ。」) という母の助言に従って、アルスルの宮廷めがけて出発するのである。途中母方の二人の叔父たちから、男の世界で通用するための、武士としての礼儀作法や武器の使い方等を教えられる。出発に際しての母親の忠告にしたがい、困窮している婦人たちを助けながら、アルスルの宮廷にたどり着き、めでたく騎士に任じられるという物語となっている。行くところ敵を知らずといった、少年ペレドゥルの圧倒的な強さには、日本の「金太郎伝説」を彷彿とさせよう。アルスルの宮廷の二大騎士として、無礼で横柄なカイ、思慮深く礼儀正しいグアルッフマイが、好対照をなして登場している。

一羽の鷹をめぐって、その真の所有者となるに相応しい女性を決める、「鷹の騎士」('Marchog y Llamystaeu') のトーナメン試合、「悩みの王の息子たち」('y lys Meibon Brenhin y Diodeifeint') の城の難儀を救うための、洞窟の化け物アダンク (Adanc) 退治、大クリスティノビル (コンスタンティノプルか?) の女帝 (amherodres Cristinobyl vawr) の設けたトーナメント試合で勝利する「粉屋の騎士」('farchog y felin') としての活躍や、「不思議の城」('Caer yr Ynryfedodeu') 探しのエピソード等、ペレドゥルの数々の武勇伝が語られている。

皇帝アルスルは最後に登場して、ペレドゥルの従兄弟や、叔父の足を痛めつけ、かたわにしてしまった宿敵カエル・ロイウ（Caer Loyw）の魔女たちを、家来たちと一緒に皆殺しにするのである。

C）「エルビンの息子ゲライントの物語」から

この物語は、カエル・スィオン・アル・ウィスクで宮廷を構える、アルスルの狩りの話から始められている。また、アルスルの宮廷を取り仕切る王妃グウェンホヴァルの存在が、一層強調されている物語でもある。

物語の主人公となる騎士は、王妃グウェンホヴァルの侍女に加えられた侮辱を晴らすために旅に出る、エルビンの息子ゲライント（Geraint uab Erbin）である。彼もまたペレドゥル同様、行くところ敵をもたないという勇者である。ゲライントは、アルスルの宮廷で不埒を働いた騎士と連れの女、そして小人の三人組を追って旅を続けるうちに、イーニッド（Inid）という娘とめぐり合う。アルスルの宮廷に戻り、皆の祝福を受けて彼女と結婚したまではよかったが、次第に怠惰な生活に更けるようになり、家来たちの不興を買うことになる。その一因が自分にあるのではと一人悩む新妻イーニッド。ちょっとした誤解から、つむじを曲げてしまったゲライントが、彼女の忍耐を試すように、意味の定かではない旅を続けると言うのが、後半の冒険物語である。頑に沈黙を命じ、一向に心を開こうとしない夫ゲライントの故無き嫉妬を、忍耐強く一つ一つ解決して、最後にはめでたく夫の理解を取りつけるというイーニッド像には、ケルトの賢い女人像がよく表われている。その姿には、中世ヨーロッパに流行した人気物語の一つ、「忍従のグリゼルダ」を想起するとも考えられるが、ただひたすら忍従するグリゼルダのイメージとは何と異ることだろう。イーニッドは、夫の感情を逆撫でしないように細心の注意をしながらも、大切なところではあくまでも譲歩せず、自分の考えを貫いて行動する、自主的なケルト女性の姿を彷彿とさせる。それはまた、ゲライントの優柔不断、猜疑心に凝り固まった狭心さと対照をなす、爽やかな人物像となっているのである。彼女を取り巻く女人の集団、特にアルスルの王妃グウェンホヴァルを中心とする宮廷世界での女性の地位の高さが、一層強調される物語でもある。中世の宮廷が、騎士を中心とする表舞台と貴婦人たちが支配する裏の世界、すなわち男性論理と女性論理の見事な二重構造の下に、営まれていたことを示している。そして表向きの力の世界は王アルスル（アーサー）が、そして裏方の情念の世界は彼の妻であるグウェンホヴァル（グイネヴィア）か束ねていることが分かるのである。

このように見てくると、少なくとも初期のウェールズの歴史と文献に現れたアルスル像の特徴の幾つかが明白になってくる。

まず、歴史と文学の文献が暗示する如く、確かにこのような人物が実在していたであろうということである。おそらく時代は5世紀から6世紀にかけてのウェールズの群雄割拠の混乱時代、活躍の舞台はどうやらグウィネズ地方を中心とした北ウェールズの地と想定される。彼の回りには、常に何らかの特殊な能力を持った戦士たちが従い、一種の魔術的な世界を統べる長であると推定される。このような初期のアルスル像は、キリスト教的世界とは趣の異なった、異教の世界に君臨する人物であったことも事実である。したがって彼は必ずしも、清廉潔白、高潔な長であるばかりではなく、キリスト教の聖人たちを迫害し、ときには自分のゲームにかまけ自らの責任を忘れるという、子どもじみた利己的行動をもとる人物であったと推定される。

中でも、何世紀かにわたってのアルスルにまつわる5編の物語を収録した、『マビノギオン』の中でのアルスル像の変遷には、興味深いものがある。猛々しい戦士を束ねるケルトの族長アルスルから、力と権威は増したものの、わがままで自分本位の行動をとるようになる皇帝アルスル、王妃グ

ウェンホヴァルと共にきらびやかな宮廷を構えて、騎士たちの冒険と恋の基盤を用意する王アルスル等、様々に変容するアルスルの姿が写しとられているからである。

『マビノギオン』の物語が収録されている二冊の写本――『レゼルッフの白い本』(*Llyfr Gwyn Rhydderch*, c.1325) と『ヘルゲストの赤い本』(*Llyfr Coch Hergest*, c.1382～1410) ――の成立の時期は、いずれも中世の真っ只中、14世紀から15世紀のことである。そしてまた注目に値する事実は、それに先立って、『ブリトン諸王の歴史』等の文献を残した、12世紀のモンマスのジョフリーの活躍があったということである。1066年のブリテン島におけるノルマン支配がいよいよ深く浸透してゆくとき、ウェールズの異教世界で活躍していた族長アルスルのイメージは、中世の宮廷を束ねる華麗な王アーサーの姿への変貌を遂げる。その存在は揺るぎないものでありながら、彼の墓の在り処が神秘の中にあるのを利用して、妖精の島アヴァロンで生き続ける不滅のアーサー、危急存亡の非常時には必ず戻ってきて、民族の危機を救う救世主アーサー像が形作られてゆく。彼の誕生に際して、大きな働きをする預言者マーリン像の創造がおこなわれるのも、ジョフリーのこの創作の世界でのことである。理想の騎士ランスロット卿 (Sir Lancelot) の物語、トリスタン卿 (Sir Tristan) と美女イズールド (Iseult) の悲恋、聖杯探究の騎士ガラハッド卿 (Sir Galahad) の物語は、ウェールズの歴史と文学の文献には現われてはこない。やがて、こうした新たな要素を組み込んで、国家統一のシンボルとしての大アーサー王絵巻が誕生する。

もう一つ確かな事実は、そのいずれの側面にも、ウェールズ地方のケルト人――ブリトン族の一種族カムリ人たち――の間で語り継がれていた伝説的人物アルスルの姿が、見え隠れしているということである。歴史上残された事実はそう多くはなく、全て断片的なものに留り、資料として考えられる文献もわずかにラテン語で書き留められたものに限られている。したがってこのアルスルなる者は、擬似歴史上の人物と考えざるをえない。しかしながら、このアルスルというブリトン人の長と彼をめぐるエピソードが、幾多の民族との熾烈な戦いを繰り返す歴史の中で、ブリトン人たちの待望の思想の要になっていたことだけは疑いえないのである。

絶えず移住してくるアイルランドのケルト人たち (ゴイデル人)、ヴァイキングに代表される北からの進入の民、そして遥かにまさる結束力を誇るアングロ＝サクソン人たちとの攻防の際、絶えず蒸し返されて語られたのが、この「アルスルの物語」であったことは、偽りのない事実であった。

断片的ではあれ、ウェールズに残された歴史と文学の文献が、それを雄弁に物語っている。

注

1．この論文は、大妻女子大学海外研修制度により、筆者がウェールズ大学バンゴール校での研修を許された際、1996年1月から97年6月にかけて受講した、Dafydd Glyn Jones氏の卓抜な講義、「アーサー王伝説」('Arthurian Legends')、に負っていることを記して、感謝を捧げたい。

参考文献

1. Leslie Alcock : *Arthur's Britain*, 1971.
2. Rachel Bromwich (ed.) : *Trioedd Ynys Prydain*, 1961, 2nd edn., 1978.
3. …… & D. Simon Evans (eds.) : *Culhwch and Olwen* , 1988.
4. …… & A. O. H. Jarman & B. F. Roberts (eds.) : *The Arthur of the Welsh*, 1991.
5. Nora K. Chadwick : *Celtic Britain*, 1963.
6. J. G. Evans (ed.) : *The White Book of Mabinogion*, 1907. reprinted as *Llyfr Gwyn Rhydderch* with introduction by R.M. Jones, 1973.
7. Sebastian Evans (trans.) : *Geoffrey of Monmouth, History of the Kings of Britain*, 1912, revised 1963.
8. Glenys Goetinck : *Peredur, A Study of Welsh Tradition in the Grail Legends*, 1975.
9. Emyr Humphreys : *The Taliesin Tradition*, 1983.
10. Kenneth H. Jackson : *The Gododdin:Oldest Scottish Poem*, 1969.
11. A. O. H. Jarman (ed.) : *Llyfr Du Caerfyrddin*, 1982.
12. …… : *Sieffre o Fynwy:Geoffrey of Monmouth*, 1966.
13. Bedwyr L. Jones : *Arthur y Cymry:The Welsh Arthur*, 1975.
14. S. Loomis : *Arthurian Literature in the Middle Ages*, 1959.
15. Caitlin Matthews : *Arthur and the Sovereignty of Britain*, 1989.
16. John Morris : *The Age of Arthur*, 1973.
17. J. Rhys & J. G. Evans (eds.) : *The Text of the Mabinogion and other Welsh Tales from the Red Book of Hergest*, 1887.
18. G. Melville Richards (ed.) : *Breudwyt Ronabwy*, 1948.
19. W. F. Skene : *Four Ancient Books of Wales*, 1868.
20. Meic Stephens (ed.) : *The Oxford Companion to the Literature of Wales*, 1986.
21. R. L. Thomson (ed.) : *Owein, or Chwedyl Iarlles y Ffynnawn*, 1968.
22. Lewis Thorp : *Geoffrey of Monmouth:The History of the Kings of Britain*, 1966.
23. A. W. Wade-Evans (trans.) : *Coll Prydain*, 1950.
24. ……(trans.) : *Nennius's History of the Britons*, 1938.
25. J. E. Cerwyn Williams (trans.) : *The Poems of Taliesin*, 1968.
26. Hugh Williams (ed.) : *Gildae De Excidio Britanniae* (2 vols.), 1899, 1901.
27. Ifor Williams (ed.) : *Canu Aneirin*, 1938.
28. …… (ed.) : *Canu Llywarch Hen*, 1935.
29. …… (ed.) : *Canu Taliesin*, 1960.
30. John Williams (Ab Ithel) (ed.) : *Annales Cambriae*, 1860.
31. Michael Winterbottm : *Gildas:The Ruin of Britain and other Documents*, 1978.
32. Neil Wright (ed.) : *The Historia Regum Britanniae of Geoffrey of Monmouth I* , 1985.